



“ The Artist of the Beautiful ” におけるOwen Warlandの変身の謎 : 何がOwenを変身させたのか？

著者	井上 久夫
雑誌名	教育学論究
号	10
ページ	7-14
発行年	2018-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027471

“The Artist of the Beautiful” における Owen Warland の変身の謎

— 何が Owen を変身させたのか？ —

The Secret of Owen Warland's Metamorphosis in “The Artist of the Beautiful”

— What induced Owen to metamorphose? —

井 上 久 夫 *

Abstract

“The Artist of the Beautiful” by Nathaniel Hawthorne was published in 1844. Owen Warland, the protagonist of the tale, has been interpreted either as an ideal artist, a fraudulent artist or an average artist who has some faults and weakness in his character.

Critics who interpret Owen as an ideal artist think that his spiritual and artistic development occurs in a long and arduous struggle characterized by “intense thought, yearning effort, minute toil, and wasting anxiety”. Those critics interpreting Owen as a fraudulent artist think that he is unable to feel even the slightest trace of sorrow and that his art is without the warmth of feeling and generosity of love essential to any durable creation. The critics interpreting Owen as an average artist regard him as an artist with some weakness and faults; little acts of petulance, nerves that flutter, a morbid sensibility and a voluntary isolation from normal human relationships.

However, reading “The Artist of the Beautiful” in detail leads me to suggest that the second and third group of critics are under an illusion with regard to Owen's personality, while the first group's interpretation of Owen's personality is very much to the point, though they are mistaken about Owen's metamorphosis.

The aim of this paper is to indicate their misunderstandings about Owen's personality and metamorphosis and then to show what induces Owen to metamorphose.

キーワード：ホーソーン、「美の芸術家」、オーエンの変身の謎

はじめに

“The Artist of the Beautiful” は1844年に *United States and Democratic Review* に掲載された作品である。Nathaniel Hawthorne (ナサニエル・ホーソーン) は物語の冒頭で4名の人物を登場させている。Art (永遠の美) を追求する時計職人 Owen Warland、Owen が密かに恋心を抱き、自らの Art の唯一の理解者だと信じている Annie、Annie の父親で Owen の師匠でもあるが、彼の Art を軽蔑し、その価値を否定する Peter Hovenden、Owen の幼い頃からの友人であるが、彼の Art を理解できない鍛冶屋の Robert Danforth である。そして最後の場面で新たに1名が加わる。Robert と Annie の子

どもで Peter を髣髴とさせる幼児である。

“The Artist of the Beautiful” は様々なレベルと角度から論じられてきたが、こと主人公 Owen の捉え方に関しては、大きく三つに分類することができる。第一は、Owen を芸術家としても、人としても成長した「理想的芸術家」と見做す捉え方である。第二は、第一とは真逆で、Owen は芸術家としても、人としても問題のある人物、すなわち「似非芸術家」と見做す捉え方である。第三は、第一と第二の中間に当たるような解釈で、Owen を芸術家としては認めるが、人間性にいささか問題がある人物、すなわち「平均的芸術家」¹⁾と見做す捉え方である。

Owen の捉え方がこのように、三つに分かれていることは妙に思われるかもしれないが、ホーソーン

* Hisao INOUE 関西学院大学教育学部教授

の作品の特徴である“device of multiple choice” (Matthiessen 276) を考えると、けっして不思議ではない。

しかしながら、“The Artist of the Beautiful” の「基本的構造」、「Owen の行動ベクトル」、そして「Owen の変身」に注目して作品を読むと、3 種類の Owen 像を許容するだけの曖昧性はないことに気づく。と同時に、この作品を論じてきた批評家、研究者が誤解していた点に気づく。

たとえば、先ほど述べた第一に属する批評家群は、「Owen の変身」を3度の失敗を乗り越えて成長した結果であるかのように錯覚している。第二の批評家群は、語り手が Owen の作り上げた「蝶」²⁾ を非常に高価な芸術品だと述べているにも拘わらず、価値なきもののように誤解している。第三の批評家群は、物語の後半³⁾ で Owen が変身しているにも拘わらず、あたかも前半の人間性を最後まで持ち続けていたかのように錯覚している。そして、これらの誤解や錯覚に基づいて、Owen 像が作り上げられているのである。

この小論文の目的は、Owen に対する批評家の誤解や錯覚を指摘したうえで、新たな Owen 像を提示することにある。そのために、①物語前半の Owen 像の検証、②物語後半の Owen 像の検証、そして変身の真偽の検証、および、Owen を「似非芸術家」、「平均的芸術家」と捉えている批評家の誤解の指摘、③ Owen を「理想的芸術家」と捉えている批評家の錯覚の指摘、④「Owen の変身の謎の解明」と「新たな Owen 像の提示」、という手順で進める。

I

“The Artist of the Beautiful” の冒頭は次の場面で始まる。

An elderly man, with his pretty daughter on his arm, was passing along the street, and emerged from the gloom of the cloudy evening into the light that fell across the pavement from the window of a small shop. It was a variety of watches, pinchbeck, silver, and one or two of gold, *all with their faces turned from the streets, as if churlishly disinclined to inform the wayfarers what o'clock it was*. Seated within the shop, sidelong to the

window, with his pale face bent earnestly over some delicate piece of mechanism on which was thrown the concentrated lustre of a shade lamp, appeared a young man. (447, italics mine)⁴⁾

多くの読者はこの短篇の題名から推測して、この若者がただの時計職人ではなく芸術家かもしれないと想像するのではないだろうか。また、批評家、研究者は冒頭の Owen の姿から、芸術に携わろうとする者が陥りやすい危険性について述べている Randall Stewart の次のことばを思い浮かべるのではないだろうか。

The two poles of human relations, to Hawthorne, were a cold aloofness and a warm sympathy. Not only those who studied human beings scientifically and those who exploited them but still *another class—those who made an artistic portrayal—were in danger of being drawn too far away from the pole of sympathy*. (Stewart 251, italics mine)

Pride, in Hawthorne's analysis, is the root evil, for *pride is a voluntary separation* (Stewart 255, italics mine)

作品冒頭で、店に一人閉じこもり、わざと店の時計を裏返しにして吊るしている Owen の姿から、彼が自ら進んで世間との繋がりを避けようとしていることが、また、その行為から彼の内には秘められた‘pride’があることが見えてくるように思われる。

さて、ここで、物語冒頭で描かれている Owen の人間性が、また、先ほど三つに分類した内の第二、第三に属する批評家たちが指摘している Owen の人間性が、物語前半の終まで変化していないのかどうかを検証する。

Owen は Robert に作業用の anvil 作成を依頼し、Robert はそれを仕上げて Owen の店に持参する。繊細な気質の Owen は、このときも Robert の力みなぎる肉体や響き渡る声に圧倒される。Robert が帰った後、Owen は、“He [Robert] would drive me mad, were I to meet him often.... I will not yield to him!” (454) と叫ぶ。Owen はこの後すぐに「蝶」

の制作に取り掛かるが、誤って「蝶」を潰してしまう。この時、次のように叫んでいる。

The vapor!—the influence of that brute force!—it has bewildered me, and obscured my perception. I have made the very stroke—that fatal stroke—that I have dreaded from the first! It is all over—the toil of months—the object of my life! I am ruined!” (454)

Owen には、確かに、苛立つ気質があり、関わりを持つことを避けようとする気質があり、おまけに、責任転嫁を行う気質があることが分かる。

また、Annie が Owen の店を訪れ、彼の制作中の「蝶」にほんの少し針の先で触れたときも、同様の姿を露呈する。彼は Annie に対して次のように叫ぶ。

“Go, Annie,” murmured he, “I have deceived myself, and must suffer for it. I yearned for sympathy—and thought—and fancied—and dreamed—that you might give it me. But you lack the talisman, Annie, that should admit you into my secrets. That touch has undone the toil of months, and the thought of a lifetime! It was not your fault, Annie—but you have ruined me!” (460)

確かに Annie によって Owen の労作は潰されたのであるが、その Annie の過失を彼が強い口調でののしっている。Annie のせいではないといいつつも、結局、彼女が自分を破滅させた、と言っている。

さらに、Peter が、Annie と Robert の婚約の宴へ Owen を招待するためにやってきた時、語り手は Owen の様子を次のように述べている。

Owen never met this man [Peter] without a shrinking of the heart. Of all the world, he was most terrible, ... On this occasion, the old watchmaker had merely a gracious word or two to say.

“Owen, my lad,” said he, “we must see you at my house to-morrow night.”

The artist began to mutter some excuse. (463)

自分の娘とお気に入りの Robert が婚約をしたことを告げにきた Peter に対して、Owen は以前と全く変わらない対応をしている。そして、この後すぐに、制作中の「蝶」を誤って壊してしまうのである。

以上、Robert、Annie、Peter に対する反応から判断して、Owen の人間性には、間違いなく問題があるといつてよい。したがって、物語冒頭から前半の終まで、第二、第三に属する批評家たちが指摘している欠点、たとえば、“little petulances”、“nerves that flutter”、“morbid sensibility” (Newman 24 参照)、“voluntary isolation from normal human relationships” (Stewart 255, Moore 278 参照)、“egocentric” (Curran 42 参照)、“excessive pride” (Stewart 255 参照) を Owen は持っているといつてよい。

では、物語後半の Owen の人間性はどのように描かれているのだろうか。検証を試みる。

II

完成した「蝶」を手にとって、Owen は Robert の家族 (Robert、彼の妻となった Annie、彼らの子ども、そして Peter) のところへ出かけ、彼らと会う。「蝶」が Peter の指に止まったとき「蝶」が色合を失い、落下しそうになる。このときの Owen の反応を、語り手は次のように述べている。“It has been delicately wrought,” said the artist *calmly*.” (473, italics mine) さらに、「蝶」が子どもに握りつぶされたとき、“he [Owen] looked *placidly* at what seemed the ruin of his life’s labor” (475, italics mine) と述べている。

物語前半では、「蝶」の制作に 3 度失敗しているが、そのときの Owen の反応と物語後半で、「蝶」を潰されたときの Owen の反応は全く異なっている。かつてのように、苛立ったり、ののしったり、怒ったりすることなく、静かに見つめていたのである。明らかに Owen は変身していたといつてよい。

また、少し視点を変えて、物語の前半と後半における登場人物たちの行動ベクトルに注目するとそのことが見えてくる。

物語の前半では、Owen のところへ Annie, Peter, Robert が次々に訪れる [Owen ← Annie, Peter, Robert >] ののであるが、後半では Owen が三人のいるところへ出かけていく [Owen → Annie · Peter · Robert >] という構造になっているのである。

る。Owen の行動ベクトルは、物語前半と後半とにおいて正反対の向きを示している。これは、受身の（自ら進んで世間と関係を持つことを避けようとする）Owen から能動の（自ら進んで世間との関係を結ぼうとする）Owen へと変身したことの証と捉えることができよう。Owen は180度の変身を遂げた、といってもよからう。

しかしながら、物語後半で Owen が三人のところへ出かけていったからといって、彼らとの心の交流（sympathy）を積極的に求めようとしていた、と捉えるのは、短絡的過ぎるかもしれない。Owen は、ひょっとすると、その能動的な行動の裏に、完成した「蝶」の価値（「王が所有する宝石の中でも格別のもつとされるほどの価値」）（473）をひけらかそうとする“pride”（高慢な心、また彼らに対する優越感）を隠していたかもしれないからだ。そうであれば、Owen は、物語中間の空白の5年間で、Robert や Peter に対抗できるだけの“a force of character”（454）を手に入れていたことになる。いや、彼ら以上のものを身に付けていたといえるかもしれない。

だとすれば、Owen は、Newman 等が彼の特徴として指摘した「苛立ち」、「かんしゃく」などを持った人物とは程遠い、とてつもなく強い性格の持ち主へと変身していたことになる。あえて一言でいえば、Owen は、物語前半にもっていた「臆病な自尊心」を「尊大な自尊心」⁵⁾へと変化させて、後半に登場していたことになる。

だが、この Owen 像は否定されなければならない。「尊大な自尊心」を持った Owen が、命がけで完成させた高価な「蝶」を Peter にそっくりな幼子に握りつぶされて、静かに、見つめておれるはずがない。物語前半で Annie に「蝶」を潰された時の Owen 以上に、大声を上げて、激しく怒り、子どもの掌から粉々になった「蝶」を取り戻そうとしたに違いない。だが、Owen は握り潰された蝶を落ちて置いて見ていたのである。

ただ、「蝶」を“placidly”に眺める Owen を心の冷たい人物と捉え、冷徹な似非芸術家と捉えている研究者もいる。

So when Owen watches the destruction of his “masterpiece” in the hands of the little child, *he is unable to feel even the slightest trace of sorrow.* . . .

Owen is so lost in a “squeamish love of the beautiful” that *he is beyond even the ordinary human reaction of grief*. It is precisely because he forsakes the whole realm of human sympathies that his art is without the warmth of feeling and generosity of love essential to any durable creation. (Jacobson 27, italics mine)

しかし、語り手は Owen を悲しむこともできない、冷たい芸術家として描いているようには考えられない。完成した「蝶」を Robert の家へ届けにきた時の Owen は次のように描かれているからである。

“I have succeeded,” replied the artist, with a momentary light of triumph in his eyes, and a smile of sunshine, yet steeped in such depth of thought that it was almost *sadness*. (467, italics mine)

語り手は、この時点で、喜び以上に“sadness”⁶⁾があったことを示唆している。

潰された「蝶」を“placidly”に見つめる Owen の姿を、「悲しむことさえできない冷たい似非芸術家の姿」ではなく、「“sadness”を押し隠した芸術家の姿」と捉えるべきではないだろうか。

Jacobson の解釈は、Peter が Owen の店を訪れ、Annie と Danforth の婚約を告げたときの場面を想起させる。

“Ah!” said Owen.

That little monosyllable was all he uttered; *its tone seemed cold and unconcerned, to an ear like Peter Hovenden’s; and yet there was in it the stifled outcry of the poor artist’s heart, which he compressed within him like a man holding down an evil spirit*. (463, italics mine)

Peter は、Owen の“Ah!”という“monosyllable”を聞いたとき、“cold”、“unconcerned”を感じ取ったのであるが、そこには、Owen の心の奥に秘められた“sadness”（愛する Annie が Robert の元へ行ってしまったことへの悲しみ）が押し隠されていたのである。

最後の場面で「蝶」が潰されたとき、“placidly”に眺める Owen を、「悲しむことさえできない冷たい似非芸術家」と捉えている Jacobson は、結果として、語り手の視点ではなく、Peter の視点に立って Owen を見ていると思えてならないのである。

さて、ここまで、Owen を「芸術家としてもまた人としても問題がある」と捉える研究者や「芸術家としての才能は認めるが人として欠点がある」とする批評家の Owen 像に対する誤解を指摘してきた。Owen の人間像に、“coldness”、“little petulances”、“isolation from normal human relationships”、“egocentric”、“excessive pride”などを認めようとする批評家、研究者の最大の問題点は、物語の前半に描かれている Owen の人間像を最後まで引きずっていたために、「Owen の変身」が見えなくなっていたことにある。

その結果として、Owen に、たとえば、“voluntary separation”といったレッテルを貼ってしまい、彼を他の短篇に登場する Ethan Brand, Richard Digby 等と同列に並べているのである。しかし、皮肉なことに、これらの人物は、Owen とは異なり、かつては「心優しい」「純朴な人々」であった。彼らは、ある出来事を境に、その人間性が変化してしまった人々なのである。「変身」という観点から言えば、Owen は、Ethan たちとは逆の人物像へと変化したといってもよからう。“The Artist of the Beautiful”を「変身」という視点から見ることを怠ると、Owen 像を誤解してしまう恐れがある。

III

Owen を「理想的芸術家」と捉えている批評家は、Owen の人間性に欠点を見出している批評家とは異なり、彼の変身には気づいている。

James W. Gargano は、Owen の歩みを “a kind of pilgrim artist’s progress” (Gargano 228) と捉え、次のように述べている。

In “The Artist of the Beautiful”, then, Hawthorne’s method is to dramatize the stages of Warland’s *growth*; each stage is cumulatively important, and only after all have been experienced can Owen possess the *maturity* and wisdom to surrender himself to his dream.

(Gargano 227, italics mine)

R. A. Yoder は、

In the spring he is reawakened, by a real butterfly, to the “pure, ideal life.” And then, for good measure, the whole process is repeated: Owen falls into a “torpid slumber” where the “spirit was not dead or passed away” but “only slept”; and he awakens “as in a former instance” with renewed strength.

Owen’s *growth* is made plausible by this repetition of incident and by the constant reminders of elapsed time . . . (Yoder 199, italics mine)

But the most convincing measure of *growth* is in character. . . . *he is never shaken as he had been earlier by the visits of the blacksmith and the old man*. He is command of himself, standing “calmly” and placidly” even in the catastrophe. Owen realizes, finally, the conditions of the artist life and willingly accepts the annihilation of his art. (Yoder 199–200, italics mine)

R. K. Gupta は、

The story is really about the *development* of an artist from the wavering faith of his period of apprenticeship to the serenity which he achieves as he attains *maturity*. (Gupta 78, italics mine)

In the initial stages of story, Owen feels diffident and insecure, and thus lacks the “force of character” requisite for the “ideal artist.” But after a long and arduous struggle characterized by “intense thought, yearning effort, minute toil, and wasting anxiety,” he achieves an unshakable faith in himself and his art. He can now contemplate “placidly” and without anguish even the destruction of his “life’s labor.” (Gupta 78–79, italics mine)

Lesley W. Brill は、

Owen's bridal gift to Annie Danforth stands as a token of acceptance of the reality of her life and of his own. As we may recall, *all four of Owen Warland's periods of catatonic despair* began when an old friend intruded upon the delicate solitude of his world. (Brill 385-386, italics mine)

Veronica Bassil は、

In Hawthorne's tale, Owen is presented as a caterpillar trying to complete its metamorphosis . . . Like the caterpillar, then, Owen's spiritual and artistic development occurs *in four stages or instars*, each punctuated by a visit, a destruction, and a transformation. (Bassil 7, italics mine)

以上をまとめると、Owen は、3 度「蝶」を完成させることに失敗したが、その度に、少しずつ成長し、理想の芸術家へと変身した、ということになる。*"all four of Owen Warland's periods of catatonic despair"*、*"in four stages or instars"*⁷⁾、*"a long and arduous struggle characterized by intense thought, yearning effort, minute toil, and wasting anxiety"*、*"growth"*、*"development"*、*"maturity"* といったことばから、そのことが窺える。

しかしながら、Owen が3 度目の「蝶」の創作に失敗する原因となった Peter の訪問、すなわち、Peter が、Annie と Robert の婚約を告げに Owen を訪れた時点では、Owen の Peter に対する反応は、物語冒頭のそれといささかも変わっていない。Owen は、これまでと同様、Peter を非常に恐れているのである。(次の例文はすでに用いたが、「Owen の変身」を検証するためには極めて重要であるので、再度用いた。)

Owen never met this man [Peter Hovenden] without a shrinking of the heart. Of all the world, he was most terrible, by reason of a keen understanding, which saw so distinctly what it did see, and disbelieved so uncompromisingly in what it could not see. (463)

Bassil 等の言うように、各 "stage" で Owen が少

しずつ成長していたのであれば、恐れに満ちたこの Owen の姿をどう説明すればいいのであろう。Owen を「理想的芸術家」と捉えた批評家たちの勘違いは、Owen が各 "stage" で少しずつ「成長」した、と捉えた点にある。Owen は各 "stage" における失敗を通して、少しずつ「成長」し、遂には理想の芸術家に変身したのではない。では、Owen はいつ、どのようにして変身したのであろうか。

IV

Owen は、Peter の来訪が原因で、3 度目の「蝶」の創作に失敗し、その後、一羽の蝶に出会う。その5 年後に Owen が Robert 宅を訪れることになる。ということは、変身の可能性としては、Owen が一羽の蝶に出会った時点か、あるいはその後 Owen が「蝶」を完成させるのに要した5 年の歳月か、のどちらかということになる。

後者の場合、Owen の変身の根拠となりうる唯一の手掛かりとなるものは、Robert が Owen の来訪時に言ったことば、*"the whole five years' labor"* だけである。したがって、もし、「5 年間」で Owen が変身したと仮定するならば、この間に Robert や Peter に負けない力を身につけ、精神的にも芸術性においも成長し、「蝶」の創作に成功した、ということになろう。

では、前者に関してはどうであろうか。Owen と「蝶」との出会いについては次のように記されている。

But in Owen Warland, the spirit was not dead, nor past away; it only slept.

How it awoke again is not recorded. Perhaps the torpid slumber was broken by a convulsive pain. Perhaps, as in a former instance, the butterfly came and hovered about head, and re-inspired him—as, indeed, *this creature of the sunshine had always a mysterious mission for the artist*—re-inspired him with the former purpose of his life. (466, italics mine)

語り手は、二度 "perhaps" を用いることによって断定を避けているが、「a mysterious mission」を携えて Owen のところへ飛んできた蝶によって Owen が "inspire" された可能性のあることを示唆

している。

この時点と、何の説明もなされていない “five years” とを比較すれば、どちらが Owen の変身に関わっているのかは、自ずと見えてこよう。

また、結末の語り手のことばも蝶との出会いが Owen を変身させた原因であることを示唆している。“He had caught a far other butterfly than this.” (475) と述べているように、過去完了形を用いている。このことは、Owen が、持参した「蝶」とは全く別の《蝶》を捕えた時点は、彼が Robert の家を訪れる前だということを示している。したがって、“a far other butterfly” を捕えたのは、3 度目の蝶との出会い以外に考えることはできまい。

以上のことから、Owen が変身したのは、3 度目の蝶との出会いがその原因となっていると断定してよかろう。だとすれば、Owen はその蝶との出会いによって、変身せざるをえないほどの衝撃を受けたことになる。換言すれば、Owen は蝶から変身せざるをえないほどの霊的な啓示を受けたことになる。

蝶から啓示を受けた Owen は、“Now for my task,” . . . “Never did I feel such strength for it as now.” (466) と述べているように、これまでとは異なる何か強い力を感じて、創作に取り組み、その結果、すばらしい芸術品を作り上げたのである。

“a gem of art that a monarch would have purchased with honors and abundant wealth, and have treasured it among the jewels of his kingdom as the most unique and wondrous of them all” (473)

これほどの価値ある芸術品を創作した Owen の原動力となった啓示とは、一体どのようなものだったのか。Owen は「蝶」からどのような啓示を受けたのだろうか。

語り手は、その啓示を探るためのヒントとして、Owen へと繋がっていく人物の名前を挙げている。

From Saint Paul's days, down to our poor little Artist of the Beautiful, the same talisman had been applied to the elucidation of all mysteries in the words or deeds of men, who spoke or acted too wisely or too well. In Owen Warland's case, the judgment of his townspeople may have been correct. Perhaps he was mad. The lack of sympathy—that contrast between himself and his

neighbors, which took away the restraint of example—was enough to make him so. Or, possibly, he had caught just so much of ethereal radiance as served to bewilder him, in an earthly sense, by its intermixture with the common daylight. (462–63, italics mine)

語り手は、Saint Paul を Owen へと繋がる初穂としている。詩人、画家、彫刻家の名前ではなく、イエスの弟子となった Saint Paul をあえて選んでいるのである。このことは、Paul を見れば Owen が分かり、Owen を見れば Paul が分かることを暗示していると捉えてよかろう。

Owen の人生にとって最大の転機は、3 度目の「蝶との出会い」であった。そしてその出会いから啓示を受け、その啓示によって彼の人生は180度変わったのである。以前、彼が最も大切にしていたものの、この上なき高価なものを失っても平然としていることができる人へと変身できたのである。

一方、Paul の人生における最大の転機は、ダマスコ途上で、天からの光に照らされ、イエスの声を聞き、啓示を受けた時である。(聖書 使徒の働き 9 章、26 章参照) この出会いを通して、彼の人生は180度変わった。Paul は、これまで持っていたもの、誇ることできたもの、自分にとって得であったものをみな損と思うようになり、それどころか、イエスからの啓示を受けたことのすばらしさのゆえに、それらをちり、あくだ、と思うようになった。(聖書 ピリピ人への手紙 3 章 1 節～8 節参照)

Paul も Owen も共に、啓示によって、新たな価値観が与えられたのである。Paul にとっての新たな価値観、それは、まさに次のことばで表現されているといつてよかろう。

愛は寛容であり、親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して絶えることはありません。(聖書 コリント人への手紙 第一 13 章 4 節～13 節)

Paul は啓示によって「愛」に生きる道があることを知ったのである。

これまで、多くの批評家、研究者は、結末の場面における“a far other butterfly”を Art (永遠の美) と捉えてきた。しかし、その根拠となるものを見誤っていた。すなわち、Owen が変身した時点を勘違いしていたのである。そのことはすでに示した。もし、Art が Owen を変身させた最大の要因であれば、“From Saint Paul’s days, down to our little Artist of the Beautiful”における Saint Paul の代わりに芸術家の名が入っていたはずである。入っていないということは、Owen が捕えていた“a far other butterfly”は、Art とは全く別のものであったはずだ。

「Paul の変身」と「Owen の変身」とを合わせてみると、Owen が蝶から啓示を受けたときの内なる思いが見えてくるのではないだろうか。Paul がダマスコ途上でイエスから受けた啓示によって「愛」に生きる人へと変身したのと同じように、Owen は3度目の蝶から受けた啓示によって「愛」に生きる人へと変身したといえるのではないだろうか。

そういえば、Saint Paul’s days (462) に生きたイエスの弟子ヨハネは、「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。」(聖書：ヨハネ第一の手紙4章18節)と述べている。物語前半で Owen が恐れていた Peter と Robert のところへ、物語後半では全く恐れることなく、平安な心の状態で出かけていくことができたのは、「愛に生きる芸術家 Owen に変身していた」からだといえるのではないだろうか。

いや、そうではない。「私は、すでに得たのでもなく、すでに完成されているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。」(ピリピ人への手紙3章12節)と Paul が言っていることを忘れてはならない。Owen は「愛に生きる芸術家に変身していた」のではなく、「愛に生きる芸術家をめざす人へと変身していた」のである。

注

- 1) 「理想的芸術家」「似非芸術家」に見合う表現が見つからなかったために「平均的芸術家」という不自然な日本語表現をあえて用いることにした。
- 2) 本文中に、かぎ括弧付きの「蝶」と、かぎ括弧なしの蝶、の二種類の表記があるが、前者は Owen が創作中の蝶を意味し、後者は Owen のところへ飛んできた自然界に生息する生きた蝶を意味する。また、<蝶>は、最後の場面における語り手の言葉、“a far other butterfly”の蝶を意味する。
- 3) 物語は、「Owen の変身」という視点から眺めると、

大きく三つに分かれる。一つ目は、冒頭から始まり、「蝶」の制作に3度失敗するまで。二つ目は、一羽の蝶が Owen の前に現れて、もう一度「蝶」の創作に取り掛かってからの5年間。三つ目は、Owen が「蝶」を完成させ、それを携えて Robert の家を訪ね、そこで、「蝶」を潰される結末まで。それぞれを、「前半」、「中間」、「後半」と表現することにする。

- 4) 引用文のあとの括弧に、著者名を記さずに、ページ数のみを書いている箇所は、次の著書からの引用である。Hawthorne, Nathaniel. Vol. X of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Ed. William Charvat, et al. Columbus: Ohio State UP, 1974. Print.
- 5) 中島 敦『李陵・山月記』東京：新潮社(新潮文庫)、1969。(1978改版、1986年38刷) p.14にある表現「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」から想いついた表現である。
- 6) この悲しみは、最後の場面で「蝶」が潰されることへの暗示と捉えることができる。
- 7) “four stages”となっているのは、Owen が「蝶」を持って Robert の家を訪れる結末の場面を含めているので“four”となっている。

引用文献

- Bassil, Veronica. “Eros and Psyche in ‘The Artist of the Beautiful,’” *ESQ*, 30 (1984), 1-21. Print.
- Brill, Lesley W. “Conflict and Accommodation in Hawthorne’s ‘The Artist of the Beautiful,’” *Studies in Short Fiction*, 12 (1975), 381-86. Print.
- Curren, Ronald T. “Irony: Another Thematic Dimension to ‘The Artist of the Beautiful,’” *Studies in Romanticism*, 6 (1966), 34-45. Print.
- Gargano, James W. “Hawthorne’s ‘The Artist of the Beautiful,’” *American Literature*, 35 (1963): 225-30. Print.
- Gupta, R. K. “Hawthorne’s Treatment of the Artist,” *New England Quarterly*, 45 (1972), 65-80. Print.
- Hawthorne, Nathaniel. Vol. X of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, Ed. William Charvat, et al. Columbus: Ohio State UP, 1974. Print.
- Jacobson, Richard J. *Hawthorne’s Conception of the Creative Process*. Cambridge: Harvard UP, 1965.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford UP, 1941. Print.
- Moore, Jr., L. Hugh. “Hawthorne’s Ideal Artist as Presumptuous Intellectual,” *Studies in Short Fiction*, 2 (1965), 278-83. Print.
- Newman, Lea Bertani Vozar. *A Reader’s Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne*. Boston: G. K. Hall & Co., 1979. Print.
- Stewart, Randall. *Nathaniel Hawthorne: A Biography*. New Haven: Yale UP, 1948.
- Yoder, R. A. “Hawthorne and His Artist,” *Studies in Romanticism*, 7 (1968), 193-206. Print.
- 『聖書(新改訳)』日本聖書刊行会 1970.
- 中島 敦『李陵・山月記』東京：新潮社(新潮文庫)、1969。(1978改版、1986年38刷)